

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	小楠先生を懐ふ（二）：論説
Author(s)	大川，周明
Citation	龍南會雜誌， 1 1 9： 2 1 - 3 0
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6003
Right	

小楠先生を懷ふ (二)

大 川 周 明

△學んで時に之を習ふ亦悦ばしからず乎

學而時習之不亦說乎。

小楠先生曰く、古の學問は第一已れに思ひ、思ひては得ざる時は是を古人に照らし其理を求むる
と見ぬ候。故に格物の業、皆な已れが誠より出で候て、得る所の理、皆な我實得と相なり申候。學
而時習とは是を古人に照らす事にて候と。井上毅氏の問に答へたるもの也。

學抑々如何の義ぞ。之を先生に従ひて解すれば、修養を意味し、努力を意味し、向上を意味す。
ルーソーの言に、讀書は學問にあらず、たゞ學問の假面を被れる者なりとあるは吾人の熟考に値す。
彼は書籍が人心を壓して却つて眞理に遠ざからしむるものあるを憾み、其著エミールに於て、凡そ
少年の未だ十二歳に満たざる者は、之に一卷の書籍をも讀ましむ可からず。たゞ天地萬有と觸接せ
しめて、無言の教訓を大自然の手に托す可きを唱へたる也。言は固より矯激に過ぎて實地に施し難
しと雖、其動かす可からざる眞理を含めるは何人も拒む事能はず。先生が松平春嶽公の爲に草せる
學校問答の中に、和漢古今明君の出づる毎に必ず先づ學校を興すを常とす。然れども今其跡につい
て見れば、出類の人才學校より出でたるものなし。況んや之よりして教化行はれ風俗敦厚を加へた

りと云ふが如きは全く其例あるを知らず。試に漢土に見む乎。漢唐宋明の世、賢人君子と稱せらるるものにして大學より出でたるあるを聞かず、唐太宗大學を興して生徒八千人の夥しきを集めたりと雖、八千の中一人の英傑を出さず。之を吾國に見む乎。當今の列藩、往くとして學校を設けざるはなきも、徒らに章句文字をもてはやして、更に人才を出すべきの勢なし。由りて來る所ある可き也と云へる、其眞意に至りては殆どルーソーの言と異なるを見ず。共にこれ一代の學風が徒らに末に趨りて本を忘れむとするを戒むる覺醒の聲也。

六經吾を著はし吾六經を著はすとなすは象山の見也。あらゆる法則の最も神聖なるものは吾人が本性の其れ也。吾が一心の成全（インデグリティー）を外にして神聖なしとするはエマルソンの見也。先王の制作を尙び、遵由以て人を導かむとするものに在りても、尙は仁義禮智は固と本性に具足すと説くにあらずば、竟に人心を満足せしむるなし。故に揚龜山の言に曰く、人性の上に一物も添ふ可からず、堯舜が萬世の法を爲したる、亦唯だ性に循へるのみと。見よ、人類は思索家の口を藉りて常に自我の權威を主張す。空間に於て人が宇宙の間に占むる位置の如何に微么なる哉。時間に於て人が永遠の間に占むる生命の如何に短少なる哉。而も其の浩々然として天地を吾が有とせずば止まざる底の心情は何の處によりか得來れりとする乎。東西の哲學者各々教ふる所ある可し。僕は即ち中庸記者の言に聽く。曰く、天命之を性と謂ひ、性に従ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教と謂ふと。語至簡にして盡さるるが如しと雖、要は天人を合一して天道即人道となし、人性を以て天道の具體的發現と觀じ、之を修め養ひて宇宙の自然と矛盾するなきに至れば、天より云へば天の目的を達し

人より云へば人生の目的を達せるものとなす也。而して先生の教訓は更に此意を明にすると共に、吾人をして學の意義に關して一段の悟了を得せしむるものあり。曰く

古人の所謂る學なるもの果して如何と見れば、全く吾が方寸の修行也。良心を擴充して日用事物の上に功を用ふれば、總て學に非るはなし。父子兄弟夫婦の間より君に事へ友に交り賢に親しみ衆を愛するなり、百工技藝農商の者と咄し合ひ、山河草木鳥獸に至るまで、其事に即て其理を解し、其上に書を讀みて古人の事歴成法を考へ、義理の究まりなきを知り、孜孜として止まず、吾心をして日々靈活ならしむる、是即學問にして修行也。堯舜も一生修行し給ひし也。古來聖賢の學なるもの、之を舍いて何にあらむや。後世の學者日用の上に覺なくして、唯だ書について理會す。是れ古人の學ぶ所を學ぶに非ずして、所謂る古人の奴隸と云ふ者也。

想ふに千古の聖賢、其辨せむとする所は唯だ一事のみ。人心は一也。古今なく東西なし。學の要とする所、吾人**心裡の至正法を會得するに在り**。會得して之に従ふに在り。學もし其本を知れば、人生の萬事、天地の自然、皆な以て人心啓發の資たらざるなし。人心如是にして日に靈活、先生の所謂る、心の理は六合に亘りて通せざることなく、惻怛の誠は宇宙の事皆な是にひゝかざるは無きに至る可き歟。

學の意義已に斯くの如しとせば、人生は直ちにあれ一大學堂にして、吾人は最後の空氣を呼吸するまで宇宙の一學生として生き、終生の努力を要求せらる。此の廣大なる意味に於ける學生の本務如何は當來の且至要の問題也。僕は今遺稿中に現はれたる先生の思想を綜合して、之に對する解答

を得むとす。これやがて生命ある倫理學にして、吾人世に處するの指針たる可きもの也。

萬物吾に備はるとなすは先生の信念也。故に學は即ち其心を存し其性を養ふの謂也。

天地の間唯一理にて候へば、人間の有用、千差萬別無限に候へ共、其歸宿は心の一つに候へば此心を本とし、推して人にも及ばし萬事の政にも相なり候。本末兼用彼此のかはり候へ共、二つに離れ候筋にては無之候。この二つには誰れざる一本より萬殊に涉り、萬殊より一本に歸り候道理にて候。

と云へるもの即ち此意味也。而して存養の工夫は思の一字に盡きたり。曰く

書經に堯の徳を稱して方思安々と申したり。此文思の字學問の眼目にて、古への學は皆な思の一字に在りと知られ候。凡そ人心の知覺は誠に限りなきものにして、此知覺を推し擴むれば、天下一物として此知覺に遺す所はなきものに候。心の知覺は即ち思に在ることにて、思ふて其筋を會得いたし候へば、天下の物理皆な吾物と相成り申す事にて候。

思とは何ぞや。内に省みて之を已れに求むるの謂也。萬事萬變也。徒らに知るを求めて思ふ事をせざれば、畢竟皆な形に滯りて應物の活用なし。中庸に慎思を後にして博學明辯を先にせるは、やゝ惑疑を催ふせしめむかなれども、博學と謂ひ明辯と謂ふ、共にこれ學の一部にして、思の一字學問の大端を包擁せり。

思は誠を要求す。誠は學の根本、始を成し終を成す。夫れ君子は本を務む、根底に於て了する所なくば萬事皆な空の空也。學ぶ者其心術にして誤あらむ乎、十年百年の苦辛悉く竟に無用の極、所

謂君子は乱をなし小人は盜をなすの轍のみ。人若し苟くも已れに思ふの誠を欠けば、目に經傳を讀み耳に談議説法を聴き、身に行ふ所は禮文中り儀刑觀る可しと雖、皆なこれ僞貌飾情、適々以て奸をまし邪を添ふるに足れり。伊藤仁齊の言に、所謂仁義禮智、所謂忠信孝悌、皆な誠を以て之が本となす。誠ならざれば仁は仁ならず、義は義ならず、禮は禮ならず、智は智ならず、孝悌忠信も亦孝悌忠信たる事を得ず。故に曰く誠ならざれば物なしと。是故に誠の一字、實に聖學の字頭學者の標的至れり。大なる哉とある、亦唯だ此意のみ。義に喻り利に喻る、惠を懷ひ刑を懷ふ、所詮は其立つ所如何に存せり。

誠は信より入る。信と誠とはもと其意味を別にする。誠は本然の眞實、源頭より湧出して工夫を用ひず。信は已れに發して自ら盡すの謂。中庸に、誠は天の道也、之を誠にするは人の道也とあるに於て、之を誠にするの努力即ち信と稱す。これ信なくして誠に至る事の不可能なる所以。孔子が屢忠信を主とすべきを教へ、人にして信なくば其可を知らざる也、大車輓なく小車輓なくば其れ何を以て行らむ哉と云へるもの、如是にして始めて了解せらる可き也。

心の誠よりして理を求む。故に得る所は悉く實得也。固有の本性に本きて諸を日用の實に施すの間、其善端に因りて之を擴め、其知識に就いて之を繹き、私心を察しては之に克たむ事を欲し、汚行を耻ぢては之を改めむ事を欲し、漸を逐ふて進み段に従ふて登る。期する所は下學下達して動止言默努めず勉めざるも道と違はざるに在り。人こゝに至れば即ち天縱の域也。

學問に就いて先生の訓ゆる所。脉絡大脉右の如し。然れども僕の筆法甚だ疎にして、珠玉の漏る

もの多々也。即ち拾ひ來りて其二三を録す。

今朱子を學ばむと思ひなば、朱子の學ぶ處如何と考ふ可し。左はなくて朱子の書に就く時は全く朱子の奴隸也。譬へば詩を作る者杜甫を學ばむと思ひなば杜甫の學ぶ所如何と考へ漢魏六朝まで泝つて可也。

飽くまでも源頭に溯る可きを説く。之を先生自身に見む乎、始め紫陽の學に入り後に自ら孔子堯舜を祖述し、遂に直ちに天に達す。聞く先生一書を著はして天言と名く、未だ就らずして非命に終ると。後世の遺憾陳じ難し。

説

尋常の人にて一と通り道理を聞ては合點すれども唯一場の口話となりて踐履の實なきは口耳三寸の學とやいはむ。學者の通患也。故に學に志すものは至極の道理と思ひなば尺進ありて寸退ある可からず。是眞の修行也。忘る可からず。

學は日新を貴ぶ。知りて行はずは今日猶昨日の如く今年尙去年の如きのみ。雅各曰く、信仰もし行を兼ねざる時は即ち死する也。子夏此理より推して、雖曰未學吾必謂之學矣の語あり。

習氣を去らざれば良心亡ぶ。虚禮虚文此心の仇敵にあらざらむや
驕怠の心あれば事業を勉むる事能はず。事業を勉めずして何をか吾靈臺を磨かむや。

論

赤子の無垢と虚心と謙遜とを具せずんば學は即ち進まず。無垢なり、故に眞理の影を現す。虚心なり、故に外物に拘牽せらるゝ事なし。謙遜なり、故に向上精進の大勇猛心を生ず。

夫れ道は經に存せり。此に求むれば足る。然りと雖これを人に求めざれば、則ち賢を希ふの心、其れ或は實ならざる也。

偉人の傳記は大なる感化を吾人に及ぼす。

吾が思のかゝる所宇内にかけて皆な我分内と致し候故、宇内のこと皆な我心窺かにひゞき候て、所謂格物も皆な空理に相成申さず、我惻恒の誠にひゞき候て、今日千緒萬端見聞する處のもの皆な我心の働きて相成候。それ故大學に古之欲明々德於天下者はと、先づ廣大の規模を示され候。心の分際は窮極なし。學問の規模は宇宙皆な我分内となす可し。

我れ誠意を盡し道理を明かにして言はむのみ。聞くぞ聞かざるとは人に在り、亦安んぞ其人の聞かざるを知らむ。預め計りて言はざれば其人を失ふ。言ふて聞かざるを強く誣ゆるは、これ我言を失ふ也。

花は開き花は落つ。花は之に満足す。たゞ其の誠を盡せ。子曰く、天を怨みず、人を尤めず。下學して上達す。吾を知るものは其れ天乎。

列舉し來れば際限なし。小楠遺稿に收むる所、學校問答、七箇條、沼山閑話、沼山對話、送永野立大序、並に詩篇、兄弟に與ふる書簡等、最も先生の存意を見る可し。而して本朝の學者中、先生獨り熊澤蕃山を推して深く尊重を加ふ。越前の人岡田生に與ふる書簡に、日本之書にては熊澤の集義和書格別に相見ゆ申候とある、以て知る可し。是故に先生の思想を充分に了解せむと欲せば、泝りて蕃山に至るを要す。永島忠直と云ふ人、頃る集義和書より節録して蕃山拾葉の編あり。之を讀まば略々足れりとせむか。

學其れ難い哉。昔は孔子哀公に答へて曰く、弟子三千、學を好む者たゞ一人顔回ありきと。鶏犬を失へば遑々如として探求すれども心を放ちて顧みる事をせざるは古人の常に戒しむる所。志して誠ならず、求めて正しからざるは眞に古今の同嘆也。然りと雖生れて已に人たり、何人か終身の憂を抱かざらむや。頭を回らせば大道最も明瞭、悠々大步皇天の命する所に嚮ふ可し。天の人を下す斷じて偶然徒爾に非る也。

大道を進む、たゞ其の一步を盡せば足る。「一日の憂は一日にて足れり」。偉人に過去なく亦未來なし。彼はたゞ永遠の現在に活く。山鹿素行此理を説く事極めて丁寧剴切也。曰く、人壽百歲に至るを以て上壽とす、大丈夫は唯だ今日の用を以て極とす可き也。一日を積みて一月に至り、一月を積みて一年に至り、一年を積みて十年とし、十年相集まりて百年たり。一日猶遠し、一時にあり。一時猶長し、一刻にあり、一刻猶餘れり、一分に在り。是を以て云ふ時は千萬年の務め皆な一分より出で、一日に究まれり。一分の間を忽にすれば遂に一日に到り、終りには一生の懈怠ともなれり。

天地の生々一分の間も滞らず、人間の血氣一分の痞ふる事なし。此くの如くにして其天長地久を得、此くの如くにして其壽命の永昌をなす。徳知の流行此くの如くにして聖人たりと。朝に道を聞いて夕に死す、聖人の心たゞ此くの如し。

長州征伐の時に際し、海舟先生書を遙かに沼山に致し計る所あり。先生即ち方針の概略を述べて更に附記すらく

事情朝暮の變態にて今日の好きは明日の惡しきと相成候間、行先き何とも計られ申さず候へ共、先づ今日に就きて先條の次第申上置候

と。海舟先生この書を得てより先生に對して一段の尊敬を拂へりと傳ふ。言は活人間を以て活社會に處す、空理に拘泥すべからざるを云ふと共に、人はたゞ現在に於て其分を盡すべきを示す。あゝ先生の如きは素行の言を躰得して躬行教へを吾人に垂るゝもの也。

偉人の力は憶れたるに働く。明治の初年、世論徒らに喧噪を極めて一代の人心歸する所に迷ひたる時、五條の誓文一度び出で天下其の向ふ所を知りぬ。五條の誓文は誠に新日本の國民に於て冲天の火の柱たりし也。吾人は誓文が先生自らの手になれるや否やを詳かにせずと雖、其必ずや先生思想に基づくものなる可きを疑はず。蓋し當時に於て爾く徹底大膽の見識を抱けるもの先生を外にして求め得ざるを信すれば也。先生去りて春秋已に四十を替へたり。知らず國民は果して先生の拓ける道を進みつゝありや。

論

古來大聲は里耳の入らず。高遠の論議群少の慍を買ふて非命に終るもの豈先生のみならむや。基督然り、ソクヲテス然り。仁人身を殺して仁益々明か也。偉人道に斃る、神旨玄々にして吾人の揣摩を許さずと雖、其間必ずや大默示ある可し。先生の白刃に死したる、亦大なる意義あるを疑はざる也。僕妄りに先生を慕ひて常に其示教に脊かざらむ事を期す。悲いかな機根下鈍にして學問の進達牛歩より遅々たり。痛恨誠に盡し難し。

小楠一卷眞に傳世の書、讀み來りて自ら發する所極めて多し。一端を記して此篇あり。(了)

説

盡其心者知其性也 知其性則天知矣

存其心養其性所以事天也

孟子